

山手町184番 — 「氷」を巡る熱き闘い

◎ 谷戸坂下・融和と対立

前稿のホィラー医師が関東大震災で命を落とした谷戸坂下の元町側には、2001年まで、交差点に面して洋風の木枠の窓を配し、翼のように開いた三角形の寄棟屋根を冠した総下見張の神奈川日冷山手営業所の姿があった。この山手町184番は1870(明治12)年創業の機械製氷工場「ヨコハマ・アイスワークス」があった場所で、大震災で倒壊後の1924(大正13)年に再建



神奈川日冷山手営業所の建物(上:筆者スケッチ)と現在の山手184番(下)

され80年の風雪に耐えてきた老躯はやがて取り壊され、現在では結婚式場となっている。

ジェラル工場のあった山手77番が和洋融和を象徴する場所であったとすれば、山手184番は和洋対立の拠点であった。

山手町77～81、91、200番の工場跡地の永代借地権を、ジェラルの遺産管財人から横濱市が

買い戻したのは1927(昭和2)年だが、これら地番

が77番に一括され元町に編入されたのは1935(昭和10)年11月である。これと同時に谷戸坂下にあった元町1～10番が山手184番に編入され欠番となる。この山手184番こそが、隣接する元町11番(現みなとみらい線の元町・中華街駅舎)にあった中川嘉兵衛の天然氷販売会社「ヨコハマ・アイス・カンパニー」と熱い火花を散らした場所だったのだ。

◎ 氷の文化史

そもそも近代以前に、氷はわれわれの生活とどのように関わってきたのだろうか。

ヨーロッパでは紀元前のアレキサンダー大王の東方遠征に氷の貯蔵穴を軍事用の食品倉庫に利用した記録が残されており、中国でも殷の時代から氷を利用した記録が見られ、秦の始皇帝の時代(紀元前200年頃)には巨大な氷室が存在したことが知られている。厳寒期の河や湖沼の氷を切り出して氷室に収め、夏に群臣に賜氷する制度があり、これを司る「凌人」なる官位まであった。中国では陰陽五行説と結び付き、氷は太陰の精と考えられ季節の祭事に不可欠なものとなった。

中国の賜氷制度や氷にまつわる節気は朝鮮半島を経て日本にも伝来し、日本書紀には氷室の記事が見られ、1988(昭和63)年には長屋王邸遺跡から発見された木簡からその存在が立証された。また旧暦6月1日を「氷の朔日」とするのは賜氷の日の名残であり、各地に氷餅を食べる習俗として現存している。

自然氷の維持には莫大な費用がかかることから賜氷制度は鎌倉中期で途絶えるが、冬場に大量の氷が入手可能な日本海側や山間部では江戸時代に至るまで氷室による確保が継続した。加賀藩は毎年6月1日に氷室の氷を江戸の将軍に献上していたし、富士の氷も同様に献上されていた。但し、前者は雪塊で飲用には適さず、いずれも儀式的な域を出なかったと想像される。

◎ 運ぶ氷から作る氷へ

機械製氷は欧米でも最も工業化の遅れた領域だったが、実はこれには宗教的な背景がある。

1805年、アメリカ人F.チュードルがニューイングランド北部の天然氷の採氷・蔵氷・販売事業を開始する。当初はジャマイカ等で流行していた黄熱病治療の一環で始めたものだが、伸びゆく需要に事業は拡大し1833年には南米、インドまで販路を広げた。これが幕末から明治初期まで横濱で使用された「ボストン氷」である。1806年に僅か130トンだった生産量は最盛期の1872年には22万5,000トンにまで拡大した。

スコットランド人W.カレンが減圧式蒸気冷凍機を発明したのが1775年、アメリカ人J.ゴリーが空冷式冷凍機の発明により機械製氷の礎を作ったのが1844年だったが「人工氷は神への冒瀆」という固定観念から実用化が遅れた。フランス人F.カレーが営業用製氷機により機械製氷を本格化したのは1869年である。

洋の東西を問わず、古代より氷は自然の摂理の中で人間の生活と密接な関わりを持っていたが故に、機械製氷が遅れたということは興味深い事実である。

◎ 幕末日本の氷事情と中川嘉兵衛の挑戦

開港地横濱では、1864(文久4)年に新装開店した横濱ホテルのレストランで既に氷が供されていたが、これは前記ボストン氷であった。ボストンで船積みされた180トンの氷はカルカット到着時には100トンに減ったといわれるが、横濱までは更に歩留りを減らし、ビール箱大の氷が3両(米3石相当)という高値だった。

これに目を付けたのが、日本の食卓の洋食化に向けて既に牛肉販売を手掛けていた中川嘉兵衛であった。

中川嘉兵衛は1817(文化14)年、現在の愛知県岡崎市に生まれ京都で漢学を修めた後、40歳で江戸に出てイギリス公使の料理人見習いをしながら、上海から運ばれる食品の鮮度を保つ氷の重要性を知った。来日直後のヘボンと巡り会うと医療分野での氷の重要性にも気付かされ、1861(文久元)年、富士山麓鰍沢に1,650㎡の土地を確保して氷池を作り100トンの氷を切り出した。これを清水港から横濱に海路輸送したが盛夏の好天により氷は全て融けてしまった。

中川は元町に居を構えイギリス駐屯軍の食料品御用達となって牛乳、牛肉、パン等の販売により、次なる氷業の可能性を伺う。1863(文久3)年には、信濃国諏訪湖、再び富士山麓、府中八王子、下野国日光山、陸中国南部釜石、上野国赤城山・榛名山下流、陸奥国津

軽青森理川、と場所を変えて採氷を試みるがいずれも失敗する。この間 1864(文久 4)年には元町 11 番に氷室を建造し、更に 4 年後にはこれを拡張している。

◎ 「函館氷」の成功

1869(明治 2)年、中川は最後の賭けに出る。榎本武揚が官軍に敗れると中川は五稜郭に向かい、その外堀の使用権を得ると函館市豊川に氷室を建設し翌年 500 トンの氷を横濱に出荷した。これはボストン氷よりも安く品質もよかったので好評を博し、翌年以降 600 トン、1,200 トンと出荷を増やし、毎年 2,000～3,500 トンの生産を行い、ボストン氷を完全に駆逐した。

中川嘉兵衛と「函館氷」の名は全国に知れ渡り、1872(明治 5)年は「氷一斤四銭」の広告が掲載される。氷 600 グラムで米 1 キロの換算になるが、ボストン氷ビール箱を 10 キロとすると約 30 分の一の価格となる。こうして氷は貴重品ながらもようやく庶民の手にも届くものとなったのである。

◎ 機械製氷の上陸

アメリカで 1869 年より始まった機械製氷はいつごろ日本に上陸したのだろうか。

日本における機械製氷の魁は福沢諭吉の熱病を救ったことで知られる。1870(明治 3)年、福井藩主松平春嶽が外国製の小型製氷機を所有していたことを聞いた慶応義塾の塾生が借り受け、大学東校(東京大学)の宇都宮三郎教授がこのアンモニア蒸発式の製氷機で製氷し、福沢の解熱に役立てた、といわれている。

中川嘉兵衛と共同事業者の岸田吟香が大隈重信に宛てた書簡に 1870(明治 3)年バージェス・バーディック商会が機械製氷の氷を買い占めて価格操作をしている旨の記載があって、既に同年横濱で機械製氷が始まっていた可能性があるが、定かではない。

1879(明治 12)年、山手 184 番に「ジャパン・アイス・カンパニー」という機械製氷工場ができて 1881(明治 14)年、オランダ人ストルネブリンクが競売で落札し社名を「ヨコハマ・アイスワークス」とした。この機械製氷と中川の天然氷は後に激しい競争に入る。

日本人による最初の機械製氷は 1887(明治 20)年に

京橋新富町に建設された「東京製氷会社」で、日産 6 トンを誇った。明治 22 年の 12 貫目(45 キロ)の氷の価格は、函館氷 80 銭に対し機械氷は 60 銭であった。

天然氷の敗色明らかになると中川自身も「東京機械製氷会社」の設立に奔走するが、その事業開始前年の 1897(明治 30)年にはこの世を去ってしまう。

◎ ヨコハマ・アイスワークス

中川の横濱氷会社と踵を接したヨコハマ・アイスワークスの社主ルドヴィカス・ストルネブリンクは、1847 年ロッテルダムに生まれ、来日後は日本郵船の機関士などを経て 32 歳の時に機械製氷に携わる。日本女性ハナと結婚し一男二女を設け、1917(大正 6)年に横濱で逝去しハナと共に外国人墓地に眠っている。

ヨコハマ・アイスワークスはその後、1912(明治 45)年帝国冷蔵に譲渡され、1935(昭和 10)年、日本食料工業に合併され後に日本水産となっていく。戦時下の 1943(昭和 18)年には日本水産、大洋漁業、日魯漁業、極洋捕鯨、全漁連が統合され帝国水産統制会社となり、戦後その解体によって製氷・冷蔵部門が日本冷蔵(後のニチレイ)となった。

一方、中川嘉兵衛の東京機械製氷は東京製氷と合併して日本製氷となり、更に東洋製氷と合併して日東製氷に、次いで大日本製氷に社名を変え、前記の日本食料工業となる。こうして元町と山手に隣接して陣を張った二つの氷会社は融合することになったのである。

中国の命湧き出ずる仲春二月は結婚シーズンでもあった。

「ようようと鳴く雁あり／旭の日始めて旦なり／若者よもし妻を娶るならば／氷の未だ融けざるにおよべ(詩経・国風中の凱旋)」

氷を巡る熱き闘いの際は、あるいは結婚式場に相応しいのかもしれない。

[参考資料]

「氷の文化史」(田口哲也／冷凍食品新聞社)

「横濱元町古今史点描」(大澤秀人／横濱元町資料館)

「横浜山手外人墓地」(生出恵哉／暁印書館)

「横浜もののはじめ考」(横浜開港資料館)

＜ストルネブリンク VS. ジェラルド＞

中川嘉兵衛とジェラルドは1864(文久4)頃、駐留軍への食料販売という同様の事業に携わっている。中川はイギリス軍へ、ジェラルドはフランス軍へ。そしてストルネブリンクを含む三



ルドヴィカス
・ストルネブリック

者が元町に「水がらみ」の事業を興していることは果たして偶然なのだろうか。

ジェラール工場建造以前は水田であったように、山手の丘の北斜面にあたる元町は、水が豊富で湿気も多く陽光も遮蔽できる。こうした事情から「水商売」に向いていたのかもしれない。いずれにせよこの三者に何らかの協力関係と確執があったことは想像に難くない。

実はある興味深い事実がある。1884(明治 14)年の神奈川県令文書に「蘭人ストルネブリンク社へ導水管敷設許可」の件というのがある。現在の堀川からヨコハマ・アイワークスへ取水用の導水管敷設を承認したものだ。堀川の水が氷の原料となる水質を保持していたとは考えられない。歴史家はこれをエーテル式製氷機の冷却水と解釈しているようだが、果たしてそうだろうか。当時、ジェラルドは水屋敷の湧水を導水管で堀川に引きタルマ船に積んで海外船に販売していた。ストルネブリンクはこの水を買って氷の原料としていたのではないだろうか。二人の関係についての興味は尽きない。



アルフレッド・ジェラルド